みなと物語

「始まり」と「終わりの始まり」……港区の市電

大阪の市営電車―市電が、花園橋（後の西区九条新道）～築港桟橋（後の大阪港）に開業したのは、明治36（1903）年9月12日。市電は、この港区から「始まり」ました。

天保山桟橋付近を走る市電
（昭和35年、港区・厚見昌彦様 提供）

市電開業前の港区（当時は西区）は、ほとんどが近世以後に開発された新田であり、その真ん中に、築港へのアクセス道路―築港大道路が造られ、その中央に線路が敷かれ、市電が開通しました。これは「大阪市電第1号」であり、「日本初の市営電車」でもありました。築港大道路は現在のみなと通のルーツであり、市電開通とともに沿線の開発が進み、港区のメインストリートとして栄えることになります。

港区でスタートした市電は、順調に路線を拡大し、戦前の最盛期には路線長120km近くにも及び、東京都電に次いで日本第2位の規模を誇りました。

戦後も市電は市民の足の主役でしたが、昭和35（1960）年8月、地下鉄4号線（現・中央線）の建設工事に伴い港車庫前（現在の地下鉄朝潮橋バス停付近）～大阪港間が休止となり、「電車代行車」というバスが運転されました。

地下鉄開業後は運行を再開する予定でしたが、同年10月、市の北部一帯で10時間に及ぶ交通マヒが発生し、その元凶とされた市電は、急激に廃止論議が高まりました。結局、休止区間は昭和39（1964）年11月に廃止され、これが「大阪市電の路線縮小第1号」となりました。市電発祥の地である港区から「終わりの始まり」―市電終焉に向けての第一歩もまた、踏み出されたのです。

市電があった頃のみなと通
（区役所屋上から）
（昭和40年頃・港区役所所蔵）

昭和43（1968）年5月には港車庫前から東の区間も廃止され、港区から市電が姿を消しました。それから1年もたたない昭和44（1969）年3月31日限りで、大阪市電は全線廃止となりました。これは「政令市初の市電全廃」でもありました。